

煤塵測定環境監視機器「ダスト濃度計」国内随一！

日本の発電・工場現場を支える技術

田中電気研究所

田中電気研究所（世田谷区経堂、田中敏文社長、03・3425・2381）は昭和24年に創業、昭和38年に株式会社として法人成りした電子機器の開発製造会社である。環境の安全・安心・信頼を測定・数値化する技術を得意とし、約20年前に開発を行った、火力発電所や製鉄所、製紙工場などで排出されるガス中の煤塵を連続的に測定する環境監視機器「ダスト濃度計」が高く評価され、火力発電所への納入実績で国内最多となっている。



同社ダスト濃度計はタイでも導入されている（左が田中社長）

高感度型ノンサンプリング光散乱式ダスト濃度計「DDM-2001」は、火力発電所、製鉄所などの大規模施設向けに納入を重ね、現在では220台ほどが大気汚染防止のために稼動している。原発が稼動していない現在、火力発電に頼る日本の電力業界でも、環境に影響を与える煤塵の発生を低く抑えた最新鋭の石炭火力発電所への納入実績が増えている。プローブ型ダスト濃度計「DDM-HAL2」は清掃工場などの小規模施設向けに新しく開発された。ともに昨年9月に公示されたダスト濃度の連続測定方法「JISZ8852」に適合可能である。光散乱方式連続環境粉塵モニタ「EDM-2010」は、粉塵が発生する作業現場空間および敷地境界線の飛散粉塵の管理用に開発された。粉塵濃度の連続測定が可能で、集

塵機の省エネ運転にも奏効する。また、今後は放射能除染に伴う作業現場などでの粉塵モニタリングへの活用の可能性もある。

日本国内でダスト濃度計の新規開発から製造販売までを行っている会社は数少ない中、ダスト濃度計の連続測定方法のJIS制定に関わり、原案作成幹事を務めた同社は、今後も市場発展に大きな存在感を示すだろう。同社の経営方針「狡兎三窟」の通り賢いウサギは逃げ道を3つ持つというように、違った市場と関わり危険分散を図ることが必要である。さらに、積極的に専門展示会に出展し、そこに商社営業マンを配置することで、各地域の営業拠点を使得って国内外の販売網構築を心がけ、自社だけでなく、販売パートナーである専門機械商社にも利益が及ぶような関係を築いている。